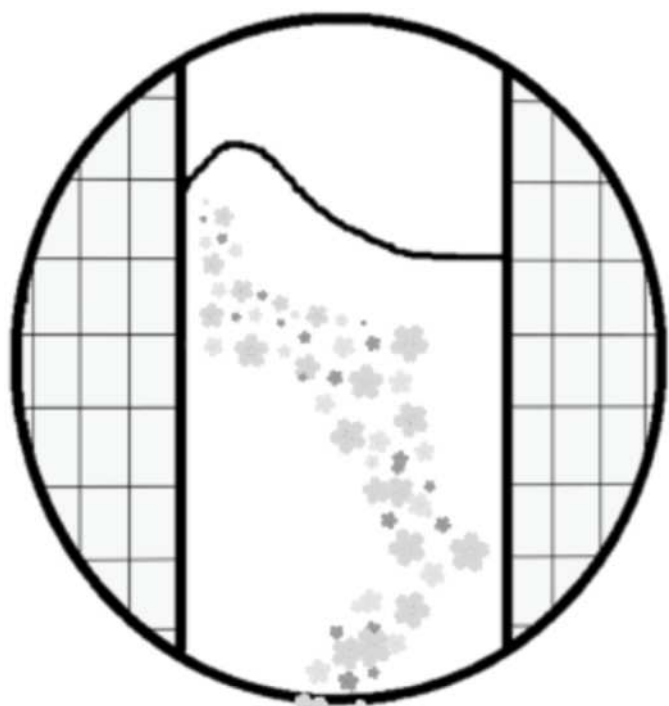




令和六年度 論文コンクール
「わたしはこう考える」

優秀作品集



京都市・区明るい選挙推進協議会
京都市・区選挙管理委員会



は じ め に

京都市・区明るい選挙推進協議会及び京都市・区選挙管理委員会では、青少年を対象に政治や選挙に関心を持っていただくために、毎年、論文コンクール「わたしはこう考える」を実施しております。五十三回目を迎えた令和六年度は、十八校から三七一点の御応募をいただきました。この中から、最優秀賞及び優秀賞に選ばれました十点の作品をここに御紹介いたします。

なお、入賞となられた方々につきましては、お名前と学校名、学年を掲載させていただきました。作品募集にあたりまして、御後援いただきました京都新聞、京都府私立中学高等学校連合会及び京都市教育委員会の皆様の御協力に対しまして厚く御礼申し上げます。

また、作品の審査を務めていただきました審査員の皆様に対しましても深く謝意を表する次第であります。

令和七年二月

京都市・区明るい選挙推進協議会
京都市・区選挙管理委員会

目次

掲載作品

テーマ「こんな京都に住みたい」

最優秀賞 山尾 颯太

優秀賞 吉崎 久真

(京都府立北桑田高等学校1年)

(京都市立上京中学校2年)

.....

.....

一

二

テーマ「SDGs達成のために」

最優秀賞 宮本 真司

(京都市立二条中学校2年)

.....

三

テーマ「わたしが感じる『国際都市京都』」

最優秀賞 大谷 泉子

(京都市立下鴨中学校3年)

.....

四

テーマ「災害の多い国に暮らす」

最優秀賞 松尾 昂

(京都市立久世中学校2年)

.....

五

テーマ「わたしは怒っている」

最優秀賞 松山 聖哉

(京都市立下鴨中学校3年)

.....

六

優秀賞 齊野平 真珠

(京都市立下鴨中学校2年)

.....

七

優秀賞 佐伯 晴子

(京都市立下鴨中学校3年)

.....

八

優秀賞 塩貝 穂佳

(京都府立北桑田高等学校1年)

.....

九

優秀賞 (匿名希望)

(京都府立洛東高等学校1年)

.....

十

入賞者一覧

.....

十一

講評

.....

十二

京都市教育委員会 指導主事 細井 悠一

こんな京都に住みたい

山尾 颯太

(京都府立北桑田高等学校1年)

僕は四歳の時に京北に引っ越してきた。それから現在まで京北に住んでいる。

電車はない、バスは一時間に一本もなく、一家に一台車がないと不便だ。友達と遊ぶとなれば、交通費だけでも何千円もかかってしまう。京北の嫌な所はと聞かれると、こんな風にいっぱい出てくるが、京北のいい所はと聞かれると、「うーん」と悩んでしまう。考えて考えて絞り出した答えは「自然が多い」だけだ。おそらくほとんどの人が「自然」と答えるだろう。僕もその中の一人だ。他にアピールできるところが思いつかない。ただ通りすぎてしまう町ではない。しかし、自然がこんなに豊かなら、これをほうっておくのはもったいない。なので、僕はこの自然を活かした町づくりをしたら、楽しく過ごせるんじゃないかと思う。そう思い僕は、自然の中で遊べる施設を作つたらいいと考えた。そんな中、真っ先に頭に浮かんだのは、『ネスタリゾート神戸』だ。一つの町のように、一日中遊べる。一日では遊びきれないぐらいだ。温泉もあり、宿泊もできる。こんな施設を京北でも取り入れたら楽しそうだ。ただ全てを真似するだけじゃなく、そこに京北ならではの要素を入れたらいいと思う。現在、京北の自然を活かした取り組みをされている会社がある。京北こりヴィレッジの「京都・京北クワッドツアー」だ。四輪のバギーに一人でのり、森の中や田んぼ道をかけぬけたり、昔ながらの

まち並みを巡るツアーだ。せっかく京北の自然を伝えられる取り組みをされているのに後に続くものがない。

僕が、小学六年になる時に、京北の第一小学校、第二小学校、第三小学校が統合し、一つになった。なので、この三小学校は廃校になり、今はそれぞれで活用はしているが、どれも中途半端な使い方になっているような気がする。それぞれで取り組むのではなく、全体で三小学校をどう活用するか決めれば、楽しい施設になると思う。僕が考えた案は、周山にある第一小学校は、一番車通りの多い所なので、道の駅にするのがいい。小学校全体を道の駅にする事で、大人はなつかしきを感じられると思う。家族で来た子どもと学校内を探検したり、ランチルームもあるので、食事も提供できる。夏は川、冬は校庭で雪遊び。市内から来た人たちだけでなく、地元に住んでいる人たちも楽しめると思う。山国にある第二小学校は、近くに運動公園があるので、宿泊施設にしたらい。夏には合宿に来る人たちをターゲットにし、地元の人たちも気軽に泊まれたらいいと思う。弓削にある第三小学校は、体験型施設にしたらいと思う。理科室で実験ができたり、体育館やグラウンドで体を動かしてゲームができたり、京北全体が一つになって、町が全部遊び場や学べる場になれば、楽しいと思う。

こんな町に僕は住んでみたい。京都市内から、車で三十分から四十分、一時間以内で来れる自然豊かな京北。だから、このまま何もせずになくなってしまふ事だけはしたくない。自然だけじゃない京北の良いところを探していきたい。

こんな京都に住みたい

吉 崎 久 真

(京都市立上京中学校2年)

最近、バスや地下鉄に乗っていて利用客が多すぎると思うことがある。私は、習い事に行く時などに、よく公共交通機関、特に地下鉄烏丸線と市バスを利用している。京都は世界的な観光都市なので、桜や紅葉、祇園祭などの観光シーズンだけでなく、一年中とても人が多い。バスを利用して満員通過が続いたこともあった。これでは、暮らしやすい京都とは決して言えない。

そこで、私は二つ提案したい。一つ目は、自動車と自転車をすみ分け、国道や府道以外の道路に、歩道以外の中央を自転車優先道路と名付けて『輪道(りんどう)』の導入を目指すことだ。四条河原町付近で、時間によつて自転車が通行できないところがあるが、その逆転の発想だ。私が通っている上京中学校周辺の地域を例に具体的に説明すると、御苑の東側にある河原町通や西側にある烏丸通、堀川通などの太い道は自動車専用とし、自転車は歩道の端を走ることにする。そして、寺町通や新町通、室町通などの比較的細い道を自動車よりも自転車が優先される輪道にする。もちろん、新町通や室町通を通らないと自宅や勤務先に車で帰れない人もいるので、自動車の通行を禁止することはできないが、あくまでも自転車を優先する道路を作ることだ。自転車優先道路とする輪道では、現在、車道にある自転車専用レーンのマークを輪道いっぽうに赤や黄色や緑などの車や歩行者でもすぐ気が付く色を使い、歩道以外の輪道いっぽうに色をつける。自動車に乗っている人にも、自転車を優先している道

であることをわかりやすくする。現在、歩道が広い国道・府道沿いでは自転車レーンが存在するが、一部の道路を自動車の利用中心から、自転車優先にシフトすることで自転車の利用を活性化したい。また、京都は多くの人が他府県から車を利用して来ることも考えられるので、国道や府道以外の道で、自転車を優先するという情報を広めるのも必要だと考える。

二つ目の提案は、観光客専用のバスを設けることだ。市バスを利用して、観光客が非常に多いと感じ、暮らしていくときさえる時がある。そこで、京都市民と他府県や外国などからの観光客をすみ分け、観光客には観光客専用のバスを利用してもらうのはどうだろうか。具体的には、ワゴンタクシーくらいのサイズの観光客専用のバスを京都市で用意する。一定の金額で乗り放題、乗り降りや支払いはアプリ経由にし、外国人の観光客向けに言語の選択にも対応する。観光客の人がよく周る人気ルート、京都駅から、どの観光ガイドにも載っている有名な寺など、例えば、二条城、仁和寺、金閣寺、京都御所、銀閣寺、平安神宮、南禅寺、八坂神社、東福寺、伏見稲荷までを結ぶ。右周り、左周りや、烏丸通を隔て東ルート、西ルートと二つに分けるのもいいかもしれない。観光シーズンによっては、乗り降りできる駅の場所が変わるのも良いと思う。観光客の人も、京都で暮らす私たちと違う車の方が、旅の仲間同士で深い交流ができたり、荷物が多少大きくてもお互い様と思えて居心地が良いと思う。

私は、この「すみ分け」の促進は、メリットがとても多いと考える。みんなの便利のために、より良くすみ分けて居心地の良い環境を作ることが大事なのではないか。日々の暮らしの中で浮かんだ気づきやアイデアは、これからの新しい「こんな京都に住みたい」の大切な素材になるかもしれない。

SDGs達成のために

「つくる責任、つかう責任」

宮本 真司

(京都市立二条中学校2年)

SDGsの十七の目標の中に、「つくる責任、つかう責任」があります。僕は夏休みの課題に取り組みながら、このことの大切さを学びました。調べた会社は、アサヒグループホールディングスです。この会社は、人にやさしく地球にやさしい商品作りをしています。

「ラベルをなくしたペットボトル」や「二酸化炭素を吸収する自販機」などは、自分達が生活する中で気づきやすいですが、その他にも、地球環境を守るために色々なことを努力していることが分かりました。例えば、二酸化炭素を減らす「アサヒカーボンゼロ」という取り組みがあったり、二〇三〇年までにペットボトルを百パーセントリサイクル素材にするという目標があったりします。他にも水をリサイクルすることで、使う水そのものを減らす取り組みもありました。僕は、目標を立てて実行する難しさを、定期テストをする度に感じます。目標を高くするとやる気が出ず達成できないことがあるし、目標を低くしてもうまくいかないことが多いです。アサヒグループホールディングスが目指す目標はどれも難しいことばかりですが、目標を達成するために日々努力していることをすごいと思いました。

そして、つくる側がここまで目標を達成するために努力してくれ

ているのに対して、自分は何ができているかを考えました。正直、今まで物を買う時に自分の欲しいものを買うだけで、環境にやさしい物かどうかを考えることはありませんでした。つくる側だけが努力しても、買う側やつかう側が意識を変えなければ、「つくる責任、つかう責任」という目標を達成することはできないと思います。一人一人の出来ることは小さいことですが、全員が心掛ければ何かが変われると思います。たいして変わらないだろうから、やらなくていいではなく、小さな努力を積み重ねることが大切だと思います。これからは、ゴミの分別を行う、リサイクル・リユースを利用する、本来に必要なものだけ買う、「環境に配慮した商品」を出来るだけ買うなどのことを意識的に取り組んでいきたいです。普段の生活の中で、環境保全のために努力してくれている会社の商品を買ったり、環境に配慮した商品を買ったりすることで、その会社が目標を達成でき、新しい環境にやさしい商品ができるという良い循環が生まれたいと思います。

地球環境を守るために、色々な会社の環境保全の取り組みについて興味を持ち、自分にできることは何かを考えていきたいです。

わたしが感じる「国際都市京都」

大谷 泉子

(京都市立下鴨中学校3年)

少し遠出をして街中に出てみると、前よりも多く外国人を見かけるようになった気がします。バスや電車など公共交通機関の車内や四条や京都駅周辺、有名な神社仏閣はもちろん、一体そこには何があるのだろうかという所でも時々見かけます。私が通学の際に通る糺の森でも、時々大型の観光バスがとまっており、おそらく中国人であろう方々が森を散策している様子を見かけます。

このように、国外からもたくさんの人々に訪れられている京都ですが、同時にオーバーツーリズムを肌で感じられるようになっています。バスは常に人でいっぱい、有名な観光地もたくさん観光客がおり、行って帰ってくるとどっと疲れてしまいます。昨年、校外学習の京都市内散策で嵐山を訪れたのですが、平日ということも相まってやはり日本人のほがめずらしいという感じでした。

このように、観光客の増加に京都の対策が追いついていないなど思うことが多々あります。この状態が続くと、京都は観光には良いが、住むには不便な町になってしまいかもしいと思います。それに、観光客側も人が多すぎることと足が遠のいてしまうかもしれません。そうならないようにするためにも、オーバーツーリズムへの対策を行わなくてはならないと思います。例えば有名な観光地のみを回るバスを新たに作ったり、お手洗やゴミ箱を増やし、観光しやすいようにし、住民の方には市民が優先的に乗ることので

きる、新たなバスを作ってみたりすることで、多少過ごしやすくなるのではないのでしょうか。そして、個人的に大切だと思うのは、観光客をさまざまな場所へ分散させることです。現在は、有名な観光地にたくさんの方が集中している状況です。あまり有名ではない場所を積極的に宣伝することで、観光客を分散させるのと、過疎化している地域を盛り上げることができます。それに、観光地が多様化することで、何度でも、様々な楽しみ方ができる京都になるかもしれません。

最近、国内外問わずにたくさんの人に訪れてもらっているからこそ、よりたくさんの人たちに京都の魅力について知ってもらいたいと思いました。だからこそ、観光客にとっては観光しやすく、何度でも訪れたくなる都市に、住民にとったら住みやすく、誇りを持てるような都市を目指していくことが「国際都市」なのではないかと思いました。

災害の多い国に暮らす

「災害に対する覚悟」

松尾 昴

(京都市立久世中学校2年)

災害という言葉聞いて、みなさんはどのようなことを思っただろう。僕は「なくなってほしい」と思ってしまった。それを思い始めたのは小学二年生の夏頃だ。

僕が小学二年生の夏頃。いつも通り学校に登校し、教室で一限目の準備などの日課を済ませ、友達と喋っていた。その時、大きな揺れが学校を襲う。急な地震に対応できず、何も動いていなかった僕に、友達が「机の下に隠れろ」と大声で叫んでくれたおかげで、何とか机の下に隠れることができた。幸いなことに、けが人は学校内にはおらず、建物の崩壊や物の破損もなかった。しかし、僕は何も動けなかったことに悔しさを覚えた。一秒でも遅れていたら、あのまま動けないままだったら、建物が崩壊して、がれきの下敷きになっていたかもしれない。そんなことを考えていると、今、なぜ自分が生きているのか不思議に思うほどだった。

家に帰ってニュースを見ると、僕が住んでいるところは震度五弱だったそうだ。物心ついてからの僕にとっては一番大きい地震となった。この地震を体験してから、避難訓練を今まで以上に気を引き締めて行うようになった。もうあの日のような屈辱を味わいたくないからだ。いつ非常事態が起こっても大丈夫なように、万全な

準備を整えていた。それと同時に、「自然災害なんてなくなってしまう方がいい」と思っていた。

そんなことを思っ、早六、七年。学校で、自然災害には地震、台風、大雨、火山の噴火など色々な種類があること、日本はトップレベルで自然災害が多いことなど、これらを知り、考え方の幅が広がった。とは言っても、「自然災害なんてなくなってしまう方がいい」という意見は変わらない。さらに、それほどメリットが大きいとも思っていない。逆に、デメリットの方が大きいと思う。地震や大雨で死者が出たり、家がなくなったり、そのせいで多くの人が悲しみ、どん底に陥っている。その災害のニュースを見るだけで心が痛む。誰もが「なくなっしてほしい」と心から願う。それが災害というものだ。それでも、何が起きたとしても人は前を回こうとする。努力して、誰かのために一生懸命になる。それが自然災害のある国の国民のあべき姿、覚悟だと思う。災害というものは対策しても対策しきれない、防災、減災しても、被害が防げたり、減ったりしない可能性だってある。だからといって対策しないのは違う。それを知った上で、全員が覚悟を持って、自然災害を対策、防災、減災し、被害を最低限に抑えていくべきではないだろうか。

災害が多い国に暮らしている以上、その覚悟からは逃げられない。だから、僕は対策、防災、減災は怠らない。さらに前を向くためにも笑顔で毎日を過ごしていきたい。

わたしは怒っている

松山 聖哉

(京都市立下鴨中学校3年)

私は人々の無遠慮な視線に怒っています。私の伯父には先天性の障害があります。ダウン症という、見た目ではつきり分かる知的障害です。特徴的な顔つきや、三歳児程度の知能であるため、様子が一般的な大人と違います。

そのため伯父と出かけると、人からじろじろと見られることがよくあります。見られるだけなら、まだ仕方ないと思います。ですが執拗に見てくる人々の表情に、蔑みや、怪異なものを見る恐怖が伺えます。それを見ると、私はやるせない気持ちになります。あざわらうように半笑いを浮かべる人もいます。すれ違いざまに数人で暴言を吐く人もいます。世の中には様々な人がいることに、幼い頃から気付いていました。

これを読んだ貴方は「そんなことってあるの?」とお思いになるでしょうか。「だって道徳の授業で差別はいけないと教わっているじゃないか」と思うでしょうか。「だって二四時間テレビでは、障害者を差別するどころか仲良く手を取り合っているじゃないか」と思うでしょうか。

確かにそれも事実です。でも現実はそのでないことばかりです。私には分かりません。障害のある人のことがそんなに珍しいのでしょうか。そんなに恐ろしいのでしょうか。幼い時から伯父がいることが普通だった私には分かりません。障害がない人も、ある人も

同じ人間なのだから。そこに優秀はないと、私は当たり前に思っています。

勿論差別がよくないことであるのは、今の時代常識でしょう。あからさまに差別的な発言をする人は絶滅しつつあるでしょう。

しかしそれは表面的でしかないと、思うことがあります。「差別はいけないことだ、だけど心の中では差別的な気持ちになってしまうのを止められない。」それが人間の自然な姿なのかもしれない。それでも私は、そんなふうに諦めて、物分かりがよい人間になりたいことはありません。無遠慮な視線を投げかけられることは辛いことです。私自身のことであるならばまだいいのです。しかし大切な身内がそのように扱われる事実が私は許せないのです。

どうか、無遠慮に見られる側の気持ちを想像出来る人が一人でも増えることを願います。視線ひとつにも様々な感情が顕著に現れるものです。たかが視線。ですが視線によって傷つく人は多くいると思うのです。

視線の威力をどうかもっと知ってほしいと思います。視線は暴力にも成り得ます。しかし一方では、優しき、親しみを一瞬にして伝える事もできるのが視線です。視線は良いコミュニケーションに使いたいものです。

わたしは怒っている

齊野平 真珠

(京都市立下鴨中学校2年)

私は世間の性被害者をくるしめる現状に怒っている。ニュースで性犯罪の多さに「なぜ減っていないのだろう」と疑問を感じたことがこのテーマを選んだきっかけだ。公共交通機関でよくみる啓発ポスターは抑止力になっていないのだろうか？このポスターには、短いスカート姿の女性が被害にあうイラストや、「混雑する扉付近は避けましょう」という標語が表示されていた。私はこのポスターをみて、「悪いのは注意を怠った被害者で、イラストによる刷り込みが被害者の自己責任論を強化してしまうのではないか」と考えた。

少し前に新聞記事で、ハツとする記事を目にした。その内容はこうだ。京都女子大学の市川ひろみ教授が、JR京都駅の電光掲示板をみて違和感を感じたそう。教授が授業中に「声をあげてみないか」と投げ掛けると、関心を持った女子学生九人が集まった。学生たちは何が引く掛かる点なのか議論を重ねた。「標語は、性被害を訴えること自体が困難なことへの配慮に欠ける面がある」などの問題を明確化させた。

こうした点を府警鉄道警察隊に伝え、「新たな視点のポスターを作りたい」と学生たちに打診したそう。電光掲示板の内容を考えた女性警察官は「正直痛いところを突かれた。でも、指摘はうれしかった」と振り返っている。私がそこで気づいたのは、同性で

あっても、無意識に加害者目線の世論に染められているということだ。それがたとえ、犯罪を摘発するべき警察官も例外ではないということだ。

このような問題をふまえて、新しいポスターが作成された。それは以下のようなものだ。このポスターのコンセプトは、「第三者が介入することで、被害者によりそう」である。この介入する方法とは、「かいにゆうさん」と名付けた画面を使って被害者によりする方法などが書かれている。他にも、新たに作られたポスターがあり、「被害者責めてませんか」「痴漢は深刻な性暴力です」等の文言が入っている。以前のものに比べると、劇的に変化したように思う。しかし、性被害が深刻なPTSDを引き起こしたり、被害を受けた後に電車にのれなくなったり等の影響を与えることを思えば、本来はこうあるべきだと感じた。

こういった考察から、無意識に世間で醸成されている感覚に自分も染まっていないか？またその感覚が人を傷つけていないか？いつも冷静に立ち止まれる自分でありたいと強く感じた。問題解決のためには、少しの疑問や怒りが突破口となるよう、強く肝に銘じておきたい。

わたしは怒っている

佐伯 晴子

(京都市立下鴨中学校3年)

昨今のSNSがもはや生身の会話と同等の影響力を持っていることは周知の事実である。そして、テレビの感想から誰にも言えない本音まで、とにかく何でも書き込めてしまうこのサービスが、いささか普及しすぎたのではないかと考えるのは私だけではないと思う。

その理由として挙げられるのが「炎上」だ。誰かの発言や行動がネット上で爆発的に拡散されて多くの批判を受けることを指し、ひどい場合「燃やされた」側は社会的地位を失ったり、心身の健康を損なったりすることもある。もちろん人々の反感を買うような言動をした本人にも非はあるが、私はどうしても「大勢が個人を攻撃する」という構図に違和感を覚えるのだ。一度炎上してしまえばなかなか収まらず、どう反論しても火に油を注ぐだけ。謝罪すれば「本当に反省しているのか」、しなければ「謝罪もなしなんてどういうことだ」である。更に言えば、その炎上のもととなった言動でさえ事実無根であったなんてパターンもあるのだ。正義感で悪事を告発しようとするのは素晴らしいが、その実態は、社会全体で無くそうとしている「いじめ」と何が違うのだろうか。

私が思うに、炎上が起こる心理には純粋な正義感のほかに「誰かを罰したい」という欲求が含まれているのではなからうか。そうなれば、いよいよ炎上というものを正当化できなくなってくる。

また、先述した「炎上のきっかけでさえ事実ではなかった」パターンも厄介だ。マサチューセッツ工科大学のツイッター(現X)研究で、誤った情報は正しい情報よりも七十%ほど拡散されやすく、加えて拡散スピードが二十倍速いということが分かっている。つまり、間違った情報ほど世に出回りやすい傾向にあるのだ。インターネットでは老若男女問わず誰でも発言できる。裏を返せば、ちゃんとした知識を持ち合わせていない人でも平等に情報を発信できてしまうのである。

炎上したことにより事態が明るみに出て、被害者救済に貢献する場合もあるのは分かる。SNSの普及を、真つ向から否定したい訳ではない。しかし、よく考えてみて欲しい。目の前にある情報は本物か。大義と欲求を混同して、攻撃しようとしていないか。これから自分が発する言葉に、しっかりと責任を持てるか。そうやって一歩踏み止まることができたなら、世界はもう少しやさしくなれるのではないかと、わたしは考える。

わたしは怒っている

塩 貝 穂 佳

(京都府立北桑田高等学校1年)

パリオリンピックがパリらしく多様性も謳い華やかに開催された。

その中で私は気になるニュースを耳にした。「女性」の首相であるメローニ首相がテストステロンを根拠とする差別発言を行った。八月一日、ボクシングの女子六六キロ級、アルジェリア代表のエイヌマン・ハリフ選手とイタリアの選手が対戦した試合で、ハリフ選手のパンチ力が凄かったためにイタリアの選手が途中棄権した。ハリフ選手は男性ホルモンの一種、テストステロンの数値が高い体質である。その体質のために去年の世界選手権で出場資格がないと判断されていた。

この試合についてメローニ首相は「男性の遺伝的特徴を持つアスリートは女子の大会に参加させるべきではない。誰かを差別したいからではなく、女性のアスリートが平等な条件で競技する権利を守るためだ」と発言し、IOCのバッハ会長と面会した際にもこのことに言及したと言われている。これに対し、IOCは「性別はパスポートに基づいて決定される」と出場の正当性を強調した。

テストステロンとは、男性に多いホルモンの一種で、女性と男性の筋肉や骨量の差の要因であると考えられている物質である。この問題は、二〇〇九年に女子八〇〇m世界選手権で優勝した南アフリカのキャスター・セメンヤ選手が欧米人から見て男性に見える外見

である事から始まる。二位になった選手が、男性に勝てるわけはないと言いつつ、セメンヤ選手は女性であるかを医学的に調査される事になった。セメンヤ選手には、性分化疾患という先天的な疾患があった為、テストステロンの値が平均的な女性の三倍だった。

その後、世界陸上連盟がセメンヤ選手に大会への参加自粛を求め、その後、いろいろな競技でテストステロンによる出場資格規定が制定されている。

ここで、私は不思議でならなかった。身体能力の違いが何故、平等の議論の対象となるのだろうか。私はバレーやバスケット、陸上競技を経験してきたが、身長制限やジャンプ力制限、高い判断力への制限はなかった。スポーツにおいて、先天的な能力の違いは当たり前存在する。

それを克服する事に挑戦したり、楽しんだりするのがむしろスポーツだと私は思う。

セメンヤ選手は生まれてからずっと女性として生きてきて何もせずに優勝した訳ではなく、練習して強くなったのだ。男性の中に、優勝するために女性になる人はいるのだろうか。

ちなみに女性でテストステロンが多い選手は、ほとんどアフリカの選手である。

私はそのようなお門違いの平等や、人権より試合の勝ち負けを優先することに憤りを感じる。

人権より大事なものなどあるのだろうか。

わたしは怒っている

(匿名希望)

(京都府立洛東高等学校一年)

私は怒っている。それはインターネット上の誹謗中傷コメントや根拠のない情報に対してだ。

私は毎日自分の好きな韓国アイドルたちの動画を観る。しかし嫌でも目につくような切り抜き動画もおすめとして流れてくる。つい最近目にしたのは、不適切な発言で炎上したアイドルの動画だった。最初は驚いたが、詳しく調べてみると韓国語から日本語に翻訳する際の翻訳ミスで、実際に話した言葉ではないということが分かった。しかしその切り抜き動画では、本当に不適切発言をしたかのように取れる内容に編集されていた。コメント欄は「〇〇酷すぎ」「ファンだったのに」という批判や誹謗中傷で埋め尽くされており、誰も動画の真偽を疑っていなかった。

誹謗中傷をしている人にとって真偽などはどうでもいいのだ。叩ける弱みがあるかどうかの問題で、そのほかは微塵も気にしていない。

昨今、芸能人やインフルエンサーなどの炎上を利用し、再生数を稼ぐために作られた悪質な切り抜き動画をたびたび目にする。本当に炎上するようなことをしていた人も中にはいるが、誤解や意味の取り違い、切り抜き方が炎上を誘う悪質なものだといふだけで、本人が批判を浴びるのは不当なこともある。

問題は、そんな根拠のない動画を鵜呑みにし、なんのもなく

誹謗中傷をしている人がいるということだ。誹謗中傷をする理由は人によってさまざまで、行き過ぎた正義感や日常生活のストレス、批判対象への嫉妬などが挙げられる。しかし、そんな気持ちは誰でも多少は持っているものだ。私もそんな気持ちを覚えることが多々ある。そして、それを人にぶつけないように制御するのが人として当たり前のことだと思う。ではなぜその気持ちを文字に書き起こし、多くの目に触れるネットに放つのか。その理由はネットの匿名性にある。もし公開されるアカウント名が本名ならば、誰かを批判したり悪口を書き込んだりするような人はほとんどいなくなるだろう。しかし実際の自分の名前とは違うことによって、自分が誹謗中傷をしたこともどこか他人事に感じるのかもしれない。

そんな今のネット社会で必要なことの一つは、自分の言葉に責任を持つことだと私は思う。ネット内に限らず人との関係など、社会を生きていくうえで当たり前のこともある。しかしどれだけの人が責任を持てているだろうか。私も完璧にはできていない。頭で分かっているても難しいことだ。

もう一つは、確かな情報かどうかを自分の力で判断できるようにすることだ。情報を客観的に見ることは非常に重要だと思う。何より、「誰にでも人権がある」ということを忘れてはいけない。ネットを見ていると、つくづくそう思う。

入賞者一覧

〈テーマ別 最優秀賞・優秀賞・入選の別、学年、氏名の五十音順〉

◆…最優秀賞 ◇…優秀賞 マーク無…入選

「こんな京都に住みたい」

- ◆山尾 颯太 (京都府立北桑田高等学校1年)
- ◇吉崎 久真 (京都市立上京中学校2年)
- 大嶽 紬 (京都市立下鴨中学校2年)
- 蒲生 ことみ (京都府立北桑田高等学校1年)
- 山田 未音 (京都府立北嵯峨高等学校2年)

「SDGs達成のために」

- ◆宮本 真司 (京都市立三条中学校2年)
- 安達 心春 (京都市立醍醐中学校3年)
- 井伊 一雅 (京都市立下鴨中学校3年)
- 魚田 詩帆 (京都市立醍醐中学校3年)
- 林 彩月 (京都市立下鴨中学校3年)
- 金本 こと美 (京都府立北嵯峨高等学校2年)
- 田村 二胡 (京都府立北嵯峨高等学校2年)
- 岡田 美咲 (京都府立北嵯峨高等学校3年)

「わたしが感じる『国際都市京都』」

- ◆大谷 泉子 (京都市立下鴨中学校3年)
- 古川 莉奈 (京都市立下鴨中学校3年)
- 矢根 希林 (京都市立下鴨中学校3年)
- 福田 栞奈 (京都府立北嵯峨高等学校1年)

「災害の多い国に暮らす」

- ◆松尾 昂 (京都市立久世中学校2年)
- 高嶋 光 (京都市立下鴨中学校2年)
- 八巻 叶 (京都市立松原中学校2年)
- 井上 栞那 (京都市立醍醐中学校3年)
- 畑谷 いゆら (京都市立下鴨中学校3年)
- 保田 凱至 (京都市立醍醐中学校3年)
- 山崎 暖真 (京都市立醍醐中学校3年)
- 角 香結里 (京都府立洛東高等学校1年)
- 土屋 実羽 (京都府立北嵯峨高等学校3年)
- 平井 美友乃 (京都府立北嵯峨高等学校3年)

「わたしは怒っている」

- ◆松山 聖哉 (京都市立下鴨中学校3年)
- ◇齊野平 真珠 (京都市立下鴨中学校2年)
- ◇佐伯 晴子 (京都市立下鴨中学校3年)
- ◇塩貝 穂佳 (京都府立北桑田高等学校1年)
- ◇(匿名) 希望 (京都府立洛東高等学校1年)
- 矢野 貴大 (京都市立西京高等学校附属中学校1年)
- 上羽 裕人 (京都市立大枝中学校2年)
- 中村 純 (京都市立醍醐中学校2年)
- 岡田 菜奈 (京都市立醍醐中学校3年)
- 井爪 笙太 (京都府立北桑田高等学校1年)
- 外田 健一 (京都府立北桑田高等学校1年)
- 林 花穂 (京都府立北桑田高等学校1年)
- 若澤 和矢 (京都府立北桑田高等学校1年)
- 西尾 咲希 (京都府立北嵯峨高等学校2年)
- 吉田 岳 (京都府立北桑田高等学校3年)

講 評

令和六年度「論文コンクール」の審査を終えて

京都市教育委員会事務局学校指導課

指導主事 細井 悠一

「わたしはこう考える」と、誰かに向かって言い切る機会を、今の私たちはどれほど持ち合わせているでしょうか？ 何をしても、何を言っても、批判の声が聞こえてきほしくないだろうか、気にせずにはいられないような空気が時代を包んでいます。そんな現代だからこそ、「わたしはこう考える」とペンを取り、背筋を伸ばし、胸を張る。今回の論文作成は、時代との、そして自己との対話の時間になったのではないのでしょうか。

そんな対話の成果を、論文の形にしてくれた三七一名の皆さんに敬意を表します。また、各学校で日ごろから指導くださっている先生方にも厚く御礼申し上げます。

今年度の応募状況は、中学生が二六七編、高校生が一〇四編でした。また、それぞれのテーマごとの応募数を見ますと、テーマ「こんな京都に住みたい」が八八編、テーマ2「SDGs達成のために」が一〇〇編、テーマ3「わたしが感じる『国際都市京都』」が二五編、テーマ4「災害の多い国に暮らす」が七七編、テーマ5「わたしは怒っている」が七九編でした。いずれのテーマも社会生活や学校生活の中で気づき、感じたことを発端に、自分ならではの「考え」を投げかけようと試行錯誤がなされていました。

テーマ「こんな京都に住みたい」では、中学生・高校生世代の皆さんからは「今の京都」がどのように見えているのかを知ることができました。もちろんプラス・マイナスの両面が見えてきましたし、生活者としての視

点、地域の構成員の一人として、でも大人とは違った見え方から語られる京都の姿に、深くうなずかされることもありました。その中で、最優秀賞の山尾颯太さん（京都府立北桑田高等学校）は、自身が四歳から暮らす、京北地域の魅力を生かしたまちづくりについて提案してくれました。「自然がこんなに豊かなら、これをほうっておくのはもったいない。」一見シンプルな結論に見えますが、シンプルなことを本気で考えるのは案外難しいものです。山尾さんの論文のユニークな点は、学校統合によって生まれた廃校の再利用について検討している点です。三小学校それぞれの地の利を生かし、それぞれに性質の違った再利用案を提案しています。ここにはやはり、地域の生活者の一人としての目、なおかつ大人とは違った目だからこそ、その気づきや高揚感が含まれています。どの案も目に浮かんでくるような気持ちと、その景色を見てみたいという興味が喚起されるものばかりです。そのうえで最後は「自然だけじゃない京北の良いところを探していきたい。」と締めくくられています。読者も一緒に探してみたいと思わせる、心惹かれる論文でした。

テーマ2「SDGs達成のために」では、十七のゴールの中からポイントを絞って考える論文が多く見られました。SDGsのように大きなテーマと向き合うときには、その中でもどこに注目するのかを明確にすることが、書き手、読み手の両方にとって伝えやすく受けとめやすいものにしてくれます。最優秀賞の宮本真司さん（京都市立二条中学校）は、十二番の「つくる責任、つかう責任」に焦点を当て、身近な飲料会社のことを調べる中で「つくる責任」について社会が変わろうとしていることを知ります。ここで、「つくる側がここまで目標を達成するために努力してくれているのに対して、自分は何ができているか」を考えます。調べることは誰もがでることかもしれませんが、調べたことの対極に自分がいて、そこには「つかう責任」があるのだということを捉え直すこと、そのうえで実際の行動について考えることは、なかなか骨の折れることです。そんな「自分事」への落とし込み方が優れた論文だったと言えるでしょう。

テーマ3「わたしが感じる『国際都市京都』」では、特にオーバーツーリズムの問題が多く、論文で扱われていました。今まさに市民生活と隣接する最前線の問題として、中学生・高校生の皆さんも肌感覚で問題と向き合っていることを痛烈に感じられるものばかりでした。最優秀賞の大谷泉子さん（京都市立下鴨中学校）もまた、この問題と向き合っておられました。「この状態が続くと、京都は観光には良いが、住むには不便な町になってしまいかもしれない」とその思いは切実です。ただ、そのうえで「大切だと思うのは、観光客をさまざまな場所へ分散させること」さらに「過疎化している地域を盛り上げる」という新たなチャンスにも目を向けています。マイナス面にばかり目を向けるのは簡単ですが、マイナスに偏ったところに生まれるプラスに目を向けるということは容易ではありません。このようにある面から見ることで別の面から捉え直す、という書き方は参考にしたいいですね。

テーマ4「災害の多い国に暮らす」にもあるように、令和六年は能登半島地震をはじめ、多くの災害が起きました。また、八月には南海トラフ臨時情報によって、日本全体で災害時の備えを見直す機運が高まり、得体的にしない不安感に包まれることとなりました。最優秀賞の松尾昂さん（京都市立久世中学校）は、自身が小学二年生のときに起きた大阪北部地震の際、何も動くことができなかった自分に対する悔しさから、「もうあの日のような屈辱を味わいたくない」と非常事態に対する万全の準備を整えるようになり、それだけでなく、自然災害について学ぶ中で「努力して、誰かのために一生懸命になる。それが自然災害のある国の国民のあるべき姿、覚悟だ」と、災害との向き合い方まで自分自身で見つけていきます。スタートはネガティブな体験だとしても、それはポジティブなものに変えていけるのだということ。そして、向き合い続けることを決意表明するような、たくましさを感じる論文です。

テーマ5「わたしは怒っている」は、躍動感ある論文が最も多く集まっていたという印象です。先にも書きましたが、やはり「自分事」として向

き合っているからこそそのオリジナリティや、エネルギーが凝縮された作品に胸打たれることもありました。最優秀賞の松山聖哉さん（京都市立下鴨中学校）は、世間の人々からの無遠慮な視線に対して怒っています。ダウン症の伯父に向けられる差別的な視線。それらに対して、いかなる理由や葛藤があるうとも、「大切な身内がそのように扱われる事実が私は許せないのです。」と強く言い切る松山さんの言葉には、心震わされます。まさに自分の内から湧き出てくる言葉で書かれている、だからこそ読み終えた後も考え続けたくなる、そんな余韻のある力強い論文でした。

三省堂 辞書を編む人が選ぶ「今年の新語2024」の大賞は、「言語化」に決定したそうです。日々の生活の中で確かに自分が感じているもの。でも、まだどの誰にも言葉にされていないもの。そんな「もの」が皆さんの身の回りにもきつとあるはず。『文章を書くこと』は、そんな日々の空気中に漂っている見えない、いや見えているのにそこにあることにも気づけていないような、そしてまだ名前のついていない何かをつかまえて、「言語化」する、そんな行為なのかもしれません。「わたしはこう考える」を書くことを通して、「言語化」された自分の考えを読み、自分自身と出会い直す。そんな営みをこれからもぜひ続けてもらいたいと思います。

令和6年度 論文コンクール 「わたしはこう考える」 作品募集

京都市・区明るい選挙推進協議会及び京都市・区選挙管理委員会では、次代を担う若い方に政治や選挙、身のまわりの問題について考え、意見を述べていただけるよう論文コンクール「わたしはこう考える」を実施しています。

この機会に、改めて社会に目を向けて、あなたが感じていること、言いたいことを自由に表現してみませんか？

テーマ

(次の中から1つ選択)

1. こんな京都に住みたい
2. SDGs達成のために
3. わたしが感じる「国際都市京都」
4. 災害の多い国に暮らす
5. わたしは怒っている

応募資格

市内在住又は市内に通学・通勤している中学生以上
19歳未満の方(令和7年3月31日現在)

字数 本文 1,000 字～1,200 字 厳守

提出先・問合せ

京都市選挙管理委員会事務局内 論文コンクール担当
(電話) 075-222-3589

(住所) 〒604-8571 京都市中京区寺町通御池上る

上本能寺前町 488 番地 京都市役所分庁舎

※提出は各学校を通じて又は直接、京都市選挙管理委員会事務局へ送付してください。各学校を通さず直接提出される場合、京都市公式HPに公開する応募フォームからも応募も可能です。

京都市 論文コンクールで検索。

応募期間 令和6年6月14日(金)～

9月13日(金)

入賞 主催者と学識経験者で審査を行い、入賞作品を選定します。

●最優秀賞(5点)・・・賞状及び賞品

●優秀賞(5点)・・・賞状及び賞品

●入選(30点)・・・賞状及び賞品

●京都新聞賞※(5点)・・・賞状

※最優秀賞の5点に授与(京都新聞紙上に作品を掲載予定)
入賞者には各学校を通じて結果を通知するとともに、入賞者の学校名、学年及び氏名を報道発表する。

最優秀賞・優秀賞の作品は、展示会(令和7年2月頃開催予定)にて展示をする。また、同作品を紹介する優秀作品集を作成し、市内図書館等に配布するとともに、京都市選挙管理委員会のホームページに掲載する。

応募上の注意

ア 原稿用紙で提出の場合

原稿用紙1行目にテーマ、2行目以降に学校名・学年・氏名(ふりがな)を必ずお書きください。生徒以外の方は、氏名(ふりがな)・年齢・連絡先(電話番号)を記載すること。作品は返却しません。

イ 応募フォームから提出の場合

氏名(ふりがな)、学校名・学年、テーマ及び本文の欄を入力し、送信すること。

ウ 共通

他の論文等を引用した場合は、出典を明記する又は引用であることが分かるように記述すること。

ホームページ

「選挙フレンズ」&「知ッテル!?選挙」

選挙について気軽に楽しく学べるホームページです。

選挙クイズや、SNSで使える「めいすいくんスタンプ」画像のダウンロードなど、コンテンツ盛りだくさん。

選挙フレンズ

検索

知ッテル!?選挙

検索



主催 京都市・区明るい選挙推進協議会 京都市・区選挙管理委員会
後援 京都新聞 京都府私立中学高等学校連合会 京都市教育委員会
発行 令和6年6月 京都市選挙管理委員会事務局
京都市印刷物 第064095号

この印刷物が不要になれば
「雑がみ」として古紙回収等へ!



わが国の選挙制度 しくみと歩み



日本の選挙制度が現在のような形になるまでには、政治への参加を求めるたくさんの方たちの努力がありました。ここで、日本の選挙制度の変遷を振り返ってみましょう。

1874 (明治7年)	板垣退助ら「民選議院設立建白書」を提出	自由民権運動
1881 (明治14年)	国会を開設する旨の勅諭	
1889 (明治22年)	大日本帝国憲法を公布 議院法、衆議院議員選挙法、貴族院令を公布	
1890 (明治23年)	第1回衆議院議員総選挙の実施 300人の民選議員誕生 (選挙資格は「満25歳以上、直接国税15円以上を納める男子」→ 有権者数は人口の約1%)	
1900 (明治33年)	衆議院議員選挙法改正 (選挙資格は「満25歳以上、直接国税10円以上を納める男子」→ 有権者数は人口の約2%)	大正デモクラシー
1919 (大正8年)	治安警察法公布 (社会主義的な活動禁止) 衆議院議員選挙法改正 (選挙資格は「満25歳以上、直接国税3円以上を納める男子」)	
1925 (大正14年)	男子普通選挙制成立 (選挙資格は納税額に関係なく満25歳以上のすべての男子) 治安維持法公布	婦人参政権運動
1928 (昭和3年)	第16回衆議院議員総選挙 (有権者数が人口の20%を超える)	軍部の台頭
1929 (昭和4年)	ニューヨークの株式大暴落 → 世界的経済恐慌	
1941 (昭和16年)	太平洋戦争勃発	完全普通選挙
1942 (昭和17年)	第21回衆議院議員総選挙 (軍部支持の翼賛政治体制協議会が推薦する候補者が議席の8割を占める)	
1945 (昭和20年)	ポツダム宣言受諾 衆議院議員選挙法改正 (女性の参政を認め、満20歳以上の全ての国民が選挙権を有する完全普通選挙が実現)	
1946 (昭和21年)	日本国憲法公布 貴族院の廃止	
1950 (昭和25年)	各選挙法を一つにまとめた「公職選挙法」公布	
1994 (平成6年)	公職選挙法改正 → 衆議院議員選挙に小選挙区比例代表並立制を採用 (70年ぶりの大改正)	
1996 (平成8年)	公職選挙法改正後初の衆議院議員総選挙	
1997 (平成9年)	公職選挙法改正 → 投票時間の延長等の投票環境向上策	
1998 (平成10年)	公職選挙法改正 → 在外選挙制度を創設 (衆議院及び参議院の比例代表選出議員の選挙のみ)	
2000 (平成12年)	公職選挙法改正 → 参議院比例代表選出議員選挙に非拘束名簿式を採用	
2002 (平成14年)	全国初の電子投票 岡山県新見市	
2003 (平成15年)	公職選挙法改正 → 期日前投票制度の創設 郵便等による不在者投票における 対象者の拡大及び代理記載制度の創設	
2006 (平成18年)	公職選挙法改正 → 在外選挙の対象となる選挙の拡大 (衆議院及び参議院の選挙区選出議員の選挙) 国外における不在者投票制度の創設 南極地域観測隊の隊員等のファクシミリ装置による投票	
2013 (平成25年)	公職選挙法改正 → インターネット選挙運動の解禁 成年被後見人の選挙権の回復	
2015 (平成27年)	公職選挙法改正 → 選挙権年齢を満18歳以上に引き下げ (施行は公布の1年後)	
2016 (平成28年)	選挙権年齢引き下げ後、京都市で初の選挙 (第24回参議院議員通常選挙)	
2018 (平成30年)	公職選挙法改正 → 参議院比例代表選出議員選挙に特定枠制度を導入	
2022 (令和4年)	最高裁判所裁判官国民審査法改正 → 最高裁判所裁判官国民審査の在外投票が可能	

京都市選挙管理委員会ホームページのご案内

京都市選挙管理委員会では、選挙について楽しく学べる二つのホームページを公開しています。ぜひ一度チェックしてみてください！

京都市選挙管理委員会 

選挙フレンズ

選挙はわたしたちのよりよい生活や社会にかかわるとても大切なものです。政治に参加するための手段である選挙について楽しく学んだら、選挙フレンズ検定にチャレンジしてね

将来は政治家になりたい人！
具体的にどうしたらいいか調べてみてね。

知っているようでよく知らない、そんな選挙のあれこれをご紹介します！

きれいな選挙のための
「三ない運動」を知っていますか？



京都市 選挙フレンズ検索



新有権者向け

選挙のあれこれまとめサイト

知Qッテル!? 選挙

民主主義を維持していくためには、有権者のみなさんが選挙で投票することが重要です。しかし、現在の日本では投票率は必ずしも高くありません。あなたのまわりに選挙や政治に興味がない友達はいませんか？

SNS で使える
めいすいくんスタンプをプレゼント!!



ありがとう



京都市 知Qッテル!? 選挙検索



明るい選挙出前授業

京都市選挙管理委員会では、将来の有権者である児童・生徒・学生の皆さんに社会の一員であるという自覚を持ってもらい、政治・選挙の意義や重要性などを学習していただくことを目的に、事務局職員が京都市内の小・中・高等学校や大学等に出向いて「選挙講座」や「模擬選挙」などを行っています。



演説・討論



投票



クイズ



申込方法等は、京都市公式ホームページ「京都市情報館」をご覧ください。

京都市 明るい選挙出前授業検索



選挙物品貸出事業

京都市選挙管理委員会では、京都市内の学校等に対し、実際に選挙で使用する選挙物品の貸し出しを行っています。生徒会役員選挙等で活用してください。

【貸出物品】

投票箱・投票用紙記載台等



申込方法等は、京都市公式ホームページ「京都市情報館」をご覧ください。

京都市 選挙物品貸出制度検索



その他

京都市動物園「9代目アニマル園長選挙」(令和6年2月6日～3月3日実施)で、ほんまものの投票箱でリアルな投票を体験していただきました。



投票にきてくれた人には
オリジナル啓発グッズのプレゼント

京都市・区明るい選挙推進協議会
京都市・区選挙管理委員会

発行 京都市選挙管理委員会事務局
令和7年2月
京都市印刷物 第063140号